

日銀支店長が語る

経済よもやま話

第25回 バッテリーからの歴史探訪



日本銀行仙台支店長 岡山 和裕

このコラムを読んでおられる方々はすでにご認識だと思うが、私は色んなところに出かけるのが好きだ。行く前から目的にしている場所だけでなく、元々想定していなかった場所を見つけることも、理由だ。

例えば、仙台市の秋保温泉を巡っていると、「静御前のお墓」と書いているところを見つけた。源頼朝に追われ平泉まで逃れた義経は今の奥州市で戦死したと言われているが、静御前は義経を慕い奥州まで追いかけてきて、義経の戦死を知り秋保温泉で力尽きたという伝説があるらしい。少し調べてみると、義経の逃亡経路は様々な説があるので、静御前のお墓と言われている場所も、新潟県長岡市、兵庫県淡路市、埼玉県久喜市など、全国各地に存在するらしい。

また、宮城県大崎市を巡っていた時のこと。「小野小町のお墓」を発見。これも調べてみると、小野小町のお墓と言われている場所も、秋田県湯沢市、京都府京都市・京丹後市、栃木県栃木市、茨城県土浦市・石岡市、和歌山県和歌山市、鳥取県伯耆町、山口県下関市など、全国に存在するらしい。そして、小野小町は山形県米沢市の小野川温泉にも立ち寄ったと言われている。

宮城県蔵王町を巡っていた時のこと。「仙台真田家のお墓」を発見。行ってみて説明を読んできると、真田幸村が大坂夏の陣で徳川家康に敗れた時に、白石城城主の片倉小十郎（伊達政宗の側近）が立派な武将だったことから、幸村の息子と娘を片倉家に託したらしい。片倉家では、その息子と娘を秘かに養育し、娘はその後何と片倉小十郎の妻になっているのだ。

そして極めつきは、宮城県川崎町を巡っていた時のこと。「支倉常長のお墓」を発見。支倉常長は伊達政宗に命じられて、遣欧使節としてヨーロッパに派遣された、歴史上有名な人物だ。派遣中に

ローマ教皇に謁見できたが、今のスペインとの通商交渉は成功せずに、7年後に帰国した、と言われる。支倉常長がヨーロッパに派遣されていた7年の間に、日本では禁教令が出されており、仙台藩としては、遣欧使節を送ったことは、明らかにしたくない事実だったのだろう。川崎町のお墓では、「この地に隠棲していたが、帰国した年の2年後に亡くなった」と書かれてあった。

ところがである。宮城県大郷町を巡っていた時のこと。またまた「支倉常長のお墓」と書いてあるではないか。行ってみると、公園から少し山道を登ったところに、確かに支倉常長のお墓があるのだ。しかも驚いたことに、ここのお墓の説明文には「仙台藩は帰国した年の2年後に死亡したとの報告を幕府に提出したが、長途の困難な使命を果たした功臣常長を人目に触れないこの山林の中に隠し静かな余生を送らせた」と書いてある。そして、亡くなったのは、帰国した年の30年後と書いてあるのだ。

これには驚いた。事実がどうなのかは私には分からないが、仙台藩の未来のために貢献した藩士を匿って、天寿を全うしたという逸話は、胸を打つものがあった。

今回は結果的にはお墓との遭遇ばかり書いたが、このような遭遇を経ての感想。どの時代にも、人間の離合集散、喜怒哀楽、出会いと別れがあるのだなあということ。今の時代にも同じようなことが発生しているに違いない。

岡山 和裕氏 プロフィール

1969年（昭和44年）生まれ
兵庫県出身。本店15部署のうち8部署を経験したオールラウンダー。東日本大震災では、金融機構局で被災金融機関との連携役を担ったほか、熊本地震では決済機構局業務継続企画課長として現場を指揮。前橋支店長、業務局参事役等を経て、仙台支店長に就任